

書評

ジャーナリスト、
環境食総合プロデューサー
金丸弘美

風と土の秋田

藤本智士・著



秋田県発行のフリーマガジン『のんびり』の特集記事を基にした。構成とアプローチが秀逸だ。人に焦点を当て、方言も豊かに拾い上げ、個性を際立たせる。

5項目で構成する。「マタギ」の項では古老に面談している。マタギは、山に住む狩猟民で鉄砲撃ちのことを指し、かつては200人いた。村落は鉄砲猟、狩猟、農業、出稼ぎなどの複合で暮らしが立った。猟での毛皮も高く売れた。獲物は仲間と分かち合う。雪や雪崩など自然の摂理を把握し、生き物の生態を知り学ぶ。猟の後は神の恵みに感謝する。その生活は、暮らしと環境と自然に沿っていて、理にかなっていた。

次いで「寒天」の項。秋田には寒天食文化があり、長野県茅野市の棒寒天が使われる。編集部企画で、母親らが持ち寄り、寒天博覧会を開いた。茅野市まで出掛け製造販売会社の人を招き、母親らと対面させる。

“地方の在り方、指し示す

それが双方の誇りと生きがいにつながったのだ。

「秋田の酒」の項。大量に生産される酒に、かつては醸造アルコールや糖類、調味料を入れたものが多く生産された。しかし、価格競争にさらされ、そのうち蔵が立ち行かなくなる。そこから、秋田の米、麴、水だけの純米酒を作る杜氏、若い蔵元、純米酒だけを扱う酒店などが生まれ、新しい潮流が生まれていった。

「標準語と秋田弁」の項では、標準語を学校で教えていた旧西成瀬小学校（現横手市増田町）の事例を軸に話を進める。東京に出た時に対等に話せる、多くの文化を吸収できる、結果として秋田弁と地域に誇りを持つようになるようになったことに注目する。また、秋田の関連書籍を出版する無明舎出版を「田舎の教養」として取り上げるなど、本書を通じて、秋田の知恵、文化、暮らしに寄り添い、持続する地方の在り方を提示する。

- ◇出版＝リトルモア
- ◇価格＝1600円
- ◇副題＝20年後の豊かさを生きるヒント
- ◇ふじもと・さとし 編集者。有限会社りす代表